



燕石
十種

猿舞沿革考

一名茶番由来

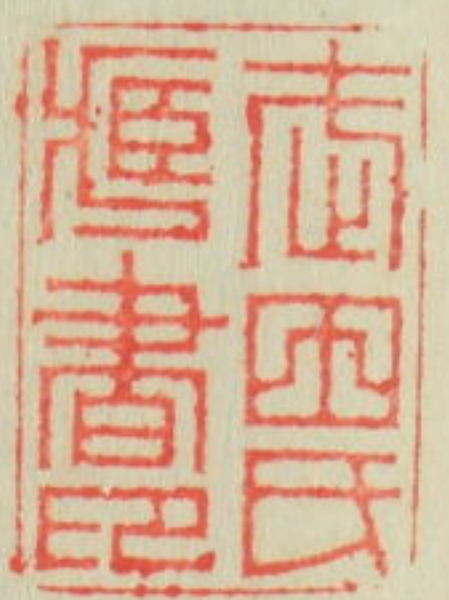
二輯

九

借
679
19



猿舞沿革考



川寄重恭識



天照太御神の隠坐於る岩屋を細開し御覽し八意思兼神に遠慮深謀
 出でて天宇受賣命に神樂此長となすは海に起る高天原動而
 八百萬神共咲古事記とある如く彼命に猿女の舞に雄々々樂々可咲くを
 八百萬神の御心とありとも大御神に御怒りをなと免は
 鎮魂祭代々行をもて古俗拾遺凡鎮魂之儀者天鈿女
 命之遺跡と天孫本紀に鎮祭之日猿女君主其神樂たるとあり其は貞観
 儀式の御巫舞訖次諸御巫猿女舞畢と見えに次弟も神祇官雅樂寮神樂次御
 巫衝宇氣とあるは御巫猿女共宇受賣命の裔孫に仕奉也る神事
 少く彼命に裔孫は猿女君に血脈も見え然も他姓此人少く猿女君に
 賜ひて神事仕奉るは初らと見えは
 但孝選准散事官とありて初ら
 さるは御巫の神樂事仕奉ると神の御心執り申とも天皇此大御側より奉る

内侍もこれ君と臣との御中執持もこれ職掌の異ありとも存意を違へる
事あり千早ふるりき事物此射向ひ奉る山事なり世文和ハナ一省ある職掌
なるもあらずもば世々神事此主とらるる所謂神樂あり故をりて神代紀
岩屋戸此段り巧作俳優ウタも同下巻火須勢理命此火遠理命小吾將為汝俳優
優之民ヒトとのみあひて足占云これ舞いしこれ舞業とのり絶えざる其
命此裔ある隼人とも傳するまあつこれをも才命此沖心解りも沖謀より出
たをも神樂といひ俳優といひも其起原を只をりき業を巧くも神小玉君
の命を禁陶ムスホレの沖心を暢和ハヤシき事なり必しも後世風此法則よりば事
しき業ありて此をさしたるものも猿樂業ありしる更なるも神樂も俳優も起
るもは変化して古は漢風此嚴ありて可笑きことばなりもむら今此世も傳
神樂歌、譜といひりの大かた曲調を志すたる漢籍系来たりりものも信屋
もあらしりちむあるを志すべしと俳優此子ら童謡諺なるものも和射ワサ小同
く誰がをりしるもあつて己が心よりともあつて根小強出らる規矩サバもたのき歌辞ウタコト

をいふ優ををりし此約される辞あり鈴屋お招の義の流んつをいふ師をなをりし此義と
いふんるる不変しと師の古史傳を見よ
かくて時世トキヨ俗り草カハ上代オムツヨの俳優神樂とてあつた漢籍韓人ともあつた参
来たりり己来唐高麗ヤマトの遠き戎の國なる樂といひりものも教多く傳るるまの
皇極紀オホノミチノキなる八僧舞續紀ハチノモノノキなる大唐樂百濟樂高麗樂新羅樂度羅樂林邑樂迦海樂オホノミチノキなる五帝本樂
長者傳オホノミチノキ抜頭陪臚鳥菩薩ハチノモノノキと尚此外オホノミチノキものも多しなりぬべし
尚上宮オホノミチノキ廐戸ウマヤ皇子ミコたご西戎オホノミチノキの樂どもをもちし作ウタりしあひ拾芥抄上未樂目錄の下に
挙ぐるる名ども此中より西
戎より後オホノミチノキもそのと皇朝オホノミチノキにて作ウタりしものと此を用ひらるる中オホノミチノキの廐戸ウマヤ皇子ミコと此オホノミチノキ
の皇極オホノミチノキ十天樂オホノミチノキ柳オホノミチノキ花オホノミチノキ苑オホノミチノキ春庭樂オホノミチノキ秋風樂オホノミチノキ胡蝶樂オホノミチノキと下オホノミチノキもる世オホノミチノキ作ウタりしものと此オホノミチノキ
皇朝オホノミチノキも雅樂オホノミチノキ寮大歌オホノミチノキ所オホノミチノキなりとを定オホノミチノキめらるる今オホノミチノキ此世オホノミチノキ所謂古樂オホノミチノキいと多く出オホノミチノキ来りしといひ
まんオホノミチノキ音律曲調オホノミチノキよりうらたらしめて假令吾オホノミチノキがこれ左とる執オホノミチノキたるとも右をとると
吾オホノミチノキの音オホノミチノキ高オホノミチノキ唱オホノミチノキも曲オホノミチノキも低オホノミチノキくもれもさすれもたまたまた来オホノミチノキたりしとて律音
抑オホノミチノキりしとてねオホノミチノキちむ久米舞オホノミチノキ田栖伎オホノミチノキ立出舞オホノミチノキ小懸田オホノミチノキ舞オホノミチノキ指節オホノミチノキ舞オホノミチノキ筑紫オホノミチノキ舞オホノミチノキ諸縣
舞オホノミチノキ倭舞オホノミチノキ駿河舞オホノミチノキ具オホノミチノキ留オホノミチノキ神樂オホノミチノキ催馬樂オホノミチノキなりと此類オホノミチノキ古オホノミチノキ小オホノミチノキ近オホノミチノキ今オホノミチノキ小オホノミチノキ疎オホノミチノキ法則オホノミチノキ曲調
こちオホノミチノキししうオホノミチノキぬオホノミチノキる鄙オホノミチノキ光オホノミチノキ影オホノミチノキ一オホノミチノキ先オホノミチノキ専オホノミチノキらオホノミチノキ雅樂オホノミチノキ上オホノミチノキ小オホノミチノキ唐オホノミチノキ高オホノミチノキ麗オホノミチノキ亦オホノミチノキ皇朝オホノミチノキ乃オホノミチノキ新製オホノミチノキ
用オホノミチノキひらるる世オホノミチノキとらたうりた先オホノミチノキ史オホノミチノキよりけりし世オホノミチノキ初オホノミチノキ移オホノミチノキる足利氏オホノミチノキ此奏オホノミチノキ改オホノミチノキりしはるる

壬八月二日の下其後於ニ船中ニ興遊ス如掉一葉ニ叅猿樂小法師中太丸叅施^{上下解}藝^願又
今昔物語^{旧本}卷廿八右近馬場殿上人種合語第廿五^ハ怕裕モ猿樂ノヤウナラ^{云々}云々禁
秘御抄中卷可遠^ハ九賤^ハ事の條^ハ有^ル藝者依^テ其^ノ事^ニ近^ク呂^ス事近代多^シ如^キ寛平遺
誠^ハ不可然^ハ况^ヤ如^キ猿樂^ハ叅^ニ庭上^ニ可^キ止^ル事也^也
播常輔神主が梅窓筆記に此文を奉てトカセ玉ヒシ
猿樂ヲ今俗ニ能乱舞ノコトオモフベカラズ建曆ハ今
ノ乱舞トイフモノハナカリナリト云フ義經紀卷五^ノ野^ハ捨^ラ事^ハ以^テ多^ク
實ニ此事ナリ尚次ノ條ニ下近^クの園より多^クなる猿樂など^ハつる新猿樂記^ハなる氷上專女^ハ北月大
御千秋^ハの歳飽腹鼓踏舞福廣聖妙高尼形^ハ勾當^ハふと都^ハ猿樂^ハ之態鳴呼
之詞^ハつる戯^ラた^レ年^ノ々^々
此等此紀の古園より因るものなりを^ハ事^ハともを
重集^ハを^テ猿樂^ハ紀^ハと名^ニづけ^テた^レ年^ノ々^々名^ハとも^ハ此^レを^ハけ
あ^ハる^ハを^ハ以^テも^ハ此^レ業^ハなる^ハ由^ハを^ハ思^ヒ弁^スべ^クその專^ハと業^ハとせ^テ者^ハも^ハつる^ハ事^ハ上^ニ書^テ置^クる^ハ事^ハと
さ^レ今^ハ何^レう^ハな^ル猿樂業^ハとも^ハの^ハなり^ハも^ハ時^ハふ^リて^ハ巧^ク出^スと^ハい^フも^ハ今昔
物語卷二十八^ハ細^ク大藏^ハ大夫紀^ハ助^ハ延^カ郎^ハ等^ハ唇^ハ被^レ咋^ハ龜^ハ語^ハ也^三の下^ハ世^ハ人^ハ上^ニ
下^ハも^ハ由^ハ先^ハカラ^シ虚^ハ欠^シテ猿樂^ハニ然^ラヤウナラ^ム危^キ戯^レ事^ハハ可^キ止^ル事^ハ宇^ハ治^ハ拾^ハ遺^ハ卷
十四^ハ高^ハ階^ハ彼^ハ平^ハが^ハ入^レ道^ハ竿^ハ術^ハ此^ハ事^ハカ^ナた^レた^レら^ハは^レつ^レる^ハ事^ハと^ハい^フも^ハ今昔

を^ハい^フも^ハ今昔^ハ卷^ハ二十五^ハの^ハ平^ハ入^レ道^ハ
今昔卷二十五の平入道
が留筆術語也二條ありまた源平盛衰記^ハ猿樂^ハと申^スる^ハ可^キ矣^ハも^ハ事^ハを
い^フも^ハ人^ハを^ハ笑^ハす^ハも^ハ信^ハを^ハど^クも^ハ平^ハ治^ハ物語^ハ参考^ハ本^ハ卷^ハ二^ハ信^ハ頼^ハ降^ハ参^ハの^ハ條^ハふ
大宮^ハ左^ハ大臣^ハ伊^ハ通^ハと^ハ聞^レ給^ヒテ^ハ一^ハ日^ハ猿樂^ハニ鼻^ヲカ^クト^ハ云^フ世^ハ俗^ハノ^ハ諺^ハコ^ソ有^リ也^也東鑑^ハ卷^ハ廿^ハ五^ハ寛
元^ハ元年^ハ九^ハ月^ハ五^ハ日^ハ此^ハ下^ハノ^ハ将^ハ軍^ハ家^ハ入^レ河^ハ佐^ハ渡^ハ前^ハ司^ハ基^ハ綱^ハ大^ハ倉^ハ家^ハ云^フ人^ハ々^ハ及^テ猿樂^ハ同^シ
書^ハ卷^ハ三^ハ寛^ハ元^ハ二^ハ年^ハ五^ハ月^ハ十^ハ日^ハ此^ハ下^ハノ^ハ将^ハ軍^ハ御^ハ方^ハ有^リ河^ハ酒^ハ宴^ハ大^ハ藏^ハ権^ハ少^ハ輔^ハ朝^ハ廣
能^ハ登^レ前^ハ司^ハ光^ハ村^ハ和^ハ泉^ハ前^ハ司^ハ行^ハ方^ハ佐^ハ渡^ハ五^ハ郎^ハ左^ハ衛^ハ門^ハ尉^ハ基^ハ隆^ハ等^ハ答^ハ辨^ス猿樂^ハ云^フ
また卷^ハ甲^ハ建^ハ長^ハ二^ハ年^ハ六^ハ月^ハ十^ハ五^ハ日^ハ将^ハ軍^ハ家^ハ念^ハ道^ハ遙^ハ造^ハ泉^ハ殿^ハ給^ヒ云^フ和^ハ泉^ハ前^ハ司^ハ行^ハ方^ハ
以下^ハ及^テ猿樂^ハと^ハ見^レえ^ル源^ハ氏^ハ物^ハ語^ハ弄^ハ花^ハ抄^ハ也^也
卷注猿樂をいふも有と云ふ思ひ入
ぬ事をももつるもいふものなるもどつるハ何人ノもを其時ノ隱みて所謂今ノ
シヤレ小等ノ事^ハを^ハ言^ヒ戯^ル事^ハ也^也
香燈新話卷二天台新隱録ハ優人秋樂語といふ
辭^ハハ優人^ハ伶優^ハ之^ハ人^ハ也^也樂^ハ語^ハ猶^ハ今^ハ致^ハ語^ハ之^ハ辭^ハと^ハい^フ
をも思ひ上^ニ件^ハ建^ハ曆^ハ此^ハ頃^ハより^ハして^ハ其^ハ舞^ハ小^ハ字^ハつき^ハ其^ハ人^ハノ^ハ黨^ハ定^ハまり^テ漸^ハく^ハ今^ハ此^ハ能^ハ
といふものも且^ハ似^ハつ^レる^ハ事^ハと^ハい^フも^ハ北^ハ心^ハ殿^ハ行^ハ幸^ハ記^ハノ^ハ應^ハ永^ハ十^ハ五^ハ年^ハ三^ハ月^ハ十^ハ五^ハ日^ハ夜^ハ入

と人も思ふらむと好くうのきすえき拙うを思ひたる思物をもとむとむら
朝の心此月の樂一々其日少きを其趣をとるを違はず言ひの事をも
しててう好と思ひ心此外は損ふなるといふ見ゆる人此目もあ不可笑
とも思ふべう免さうこそ思ふ人も見物も心の中なごみ和らき世のこぼの
曲一々朝夕此勤れいそぐきあどを思ひもよすあみかけあき楽
一む同を詰尼ふ威儀正一々推樂れらや亦聞見らふも根者一々淫戯ど
りの舞をよとらうをよもるふびきふ此を故宇受賣命の儀女舞中古のこ
づひさぎやも叶ひてこそ涙の能優風を失ぬ様うをたるといひぬると然
てこれも室永享保の近きあふる起るぬれど其ともなうこそ此事也と見申
後ふ怨を既く中古よりある事よ宇治拾遺なる信従行綱が細脛
高く指上るえこれ学び一々猿樂を新猿樂記名目系を作て設け類
よるゆゑ臨時で思ひ案つる今此狂言系番も俄あといふ類をも似て
よふ是らる更よといふも今昔物語廿八日左京大夫付異名活中立
宇治拾遺卷十一
からその後の事と

の左京大夫某て人此色青きを殿上人青経の君と名一々を天皇の六借
まふふよりて以後再青経とよはむ人酒有菓をあどあせて賤むと起
清一々堀川の通大臣あど中將をあせりて是を志彼青経九々何ち
行くを失言はゆとよりて起清の賤一々まふ事をつる條堀河ノ
中將補ノナヨカニ微妙キ裾ヨリ青キ出シ褂シテ指貫モ青キ色ノ指貫ヲ
著タリ隨身三人ニ皆青キ狩衣袴袖ヲ著セタリ一人ニ青ク録ル折敷ニ青次
盤ニ宿ヲ盛テ居タルヲ捧サセタリ一人ニ青瓷ノ瓶ニ酒ヲ入テ青キ薄様ヲ以テロ
裏テ持セタリ一人ニ青キ竹ノ枝ニ青キ小鳥五ツ許ヲ付テ持セタリ此等ヲ
殿上ノロヨリ持次ギテ殿上ノ前ニ参タレバ殿上人共此ヲ見テ皆諸音ニ咲嗶ル事
愕タシと見えあはれ村上天皇の
御時ありきゆゑ同書巻右近馬場殿上人種合語弟廿九小
今昔後一條ノ院天皇ノ御代ニ殿上人藏人有ル限負ヲ尽シテ方ヲ分テ種合口為
ル更有ケリ二人ノ頭ヲ左右ノ首トシテ各分テケリ其頭ハ左ノ頭ハ辨印本
兵部卿藤原ノ
重尹右ノ頭ノ中將源ノ頭基ノ朝臣等也云々右ノ方屋ヨリ出タル者アリ見レバ

思ケル上ニモヨニカタハライタキ事思食タル気色ナリケリ既ニフトコロヨリ紙ニ裸タルモノヲ
トリ出スヲ見テサセル事アラシト思ヒテ餘ノカタハライタサニ諸人面ヲウツブセケリサテ御前ニ
置タル物ヲヒキヒロケテ見給ハ銀ノ折敷ニ金ノ橋ヲ置キタリ心モオヨズ作りタリケリ
是ヲ見テ皆目ヲ教馬カシ諸人ニカリテゾ見エケル云々サルホドニ返リ引出物トテ紙一枚ヲ給
テ九都近キ庄ノ千石バカリナルヲ給テ高サカヘテイヨク奉公仕リ重テ御領モ預リ方ニ榮
花目出多アリケルト
今世の茶番も枚某より趣向をばとせしむるを後言を思ふに珍らし
ある事ども巧み出まき品れり景物も出せしむる先か思ひおとせしむ
る和しむる奥あらむあらむせしむる
四月四日下ノ幕府有御勝負事人々参進等如前左馬権頭尾張前
司武藏守秋田城介著坐面々及合手引出物此間兵衛太郎光政等有喧嘩
以引出物投合手仍満坐興宴頗醒畢とらる事上りたりも持たるん
る心事初らば増鏡なる事同く仕法ときら由有御勝負事といひ
は皇御負なりとあり
今此茶番小類を定むる風違ふ引引出物のとりあへば今この景物といふ

そのふれりわくと太閤紀卷の十五秀吉と異教の引出物とて沙遊真事と
以て系文縁三年六月廿八日の事於ふ瓜畑あどむらく作らりし所
おきて瓜屋旅籠屋をいふも麻相ふいとあみ瓜屋人此ま徳をたるん
於る名をも願史又中心をも願みしむひつて長陣の骨を補ひしむひ
於る引出物を柿帷を先んじりしとらるる思き類中引出物味よ
此瓜屋のしゆと有る所商人のしゆ所も於るつとらるる有る
瓜屋の丹波中納言秀勝織田常真公加賀大納言會津忠三市氏卿三松老
織田有樂老有馬中務右法印前田氏部卿三法印あどり
も僧をもつてき様つとらるる引出物也旅籠屋此亭より
蔭田権佐なりふらると茶屋の亭より上りて上りて上りて上りて
るる時臨然たる業を狂言茶番の類といふ
北野の大茶湯といふ事此種
小別名名徳屋の大茶湯といふ
然在茶番と名号つとらるる近き事なるをこれとらるる
等同じき業の中古より上りて上りて上りて上りて上りて上りて
劣き下賤の戲事とも落し欠りしき際よりすまじくかた事

悉皆君と臣は中を和し階をり出た家あつて我が古代のさる
うひるが西戎人の所謂滑稽此趣を得るは淳于髡と云ふ人西京
雜記卷四下京北有古庄者云善詭譎二十石隨以諧謔皆握其樞要而得其歡心云京師至今
京師至今俳戲皆稱古滑稽と云ふを見まふ以古庄と云ふものいふべきさる人なり

また典豊臣太閤の侍者嵐瓊里此其あつてをど上と云ふて人必を固く
頑魯なる中自ら和滑をば此無てを有るまじき事とて大鏡の巻大
うゝ延喜帝の紀ふあつてをどわすゆへ其趣をまてあつたる人か
物いひらうとあつてけりさふつてあつたる物をいひまてを大事
固くあつたるをどあつて事ありさる事なりさる事なりさる事なり
物いひらうとあつてけりさふつてあつたる物をいひまてを大事
てひらふ對面此事の後に秀衛と云ふ人あつたるをどあつたるをど
まてをどあつたるも仁義礼智信も正しくあつたるをどあつたるをど
義経朝臣も宜しくあつたる滑滑をば備へらるるをどあつたるをど
れを朝夕に起すもあつたる此の奉勤も容解に付となくあつた

たくはなやぎさるは言徳の和滑いれをりあつたる
亦圖見も物いひらうとあつたるをどあつたるをどあつたるをど
入らふ事難く腹黒く射人も其人も射向ふ事たやすうらを自然
は大寿も常般石此草の長くあつたるをどあつたるをどあつたるをど
家内ふ事なり父母夫妻子孫兄弟も亦和してあつたるをどあつたるをど
故宇受賣命此宮風の御靈を朝夕祈願白く偏屈も頑魯なる心
を和欠心を延子む折るをどあつたるをどあつたるをどあつたるをど
除きを能の相狂言と云ふものあつたるをどあつたるをどあつたるをど
いふをど舞も巧も出たるをどあつたるをどあつたるをどあつたるをど
天照大御神も岩戸隠ら文朝ふけふ樂と云ふあつたるをどあつたるをど
皆昔の歡び聞くと御稜威を幸へ恩頼を蒙施と云ふあつたるをどあつたるをど
り於面白

文政九年四月十五日

源重恭記

重恭疏く気吹廼屋の垣内カキツに入ると常小宮比神ヒコノミヤノヒコを拜齋ヲカミイフき猿樂サザレを
 此コノしたる際サマを好ヨク免ユルるまふ今世イマノヨを専マコトら慨ウレシふ免ユルる茶番チヤバンといふ業ウヂを
 古代コノコトの俳優ハシラヒもや通トひたるさあ見ミゆるをいふ正マサし典ヨリト拠トも
 をたると物モノも暇ヒマく見ミ出デるはふふ紙シ端ハタの記キ一ヒト試シむるは
 くりれそのふなり初ハジメうら戯サレ業ウヂを事コトしけふ書カキなりけふ
 いと嗚呼ウハけし猿サザレふゆと見ミる人ヒトらを笑ウツひあむるはば猿
 免ユルけるも猿サザレ業ウヂ此コノ平生ヘイセイたる物モノらと思オモひ上ウりて
 酒サケのちぬ吾ガ々々けを喝カたふる猿サザレも似ニく見ミふるをけむ
 ともしもあう

引用書目

- 古車記 日本書紀 舊車紀 古語拾遺
- 延喜式 續日本紀 貞觀儀式 三代實錄

- 本朝月令 西宮記 江次第 本朝文粹
- 大鏡 榮花物語 うけろ日記 今昔物語本
- 古事談 宇治拾遺 十訓抄 沙石集
- 吾妻鏡 増鏡 参考平治物語 義經記
- 源平盛衰記 禁秘御抄 拾芥抄 下學集
- 海人藻芥 尺素往来 庭訓往来 参考太平記
- 祢サ光ノの記 源氏物語 同弄花抄 枕草帛
- 北山殿行幸記 七十一番職人盡歌合 御ミ由ユのノ上ノ日記
- 洛陽田樂記 新猿樂記 文安田樂能記
- 粟田口勸進猿樂記 紀河原勸進猿樂日記 翰林胡蘆集
- 山王祭禮記 月能桂 近代世車談綺
- 太閤記 老人雜話 和漢三方圖會
- 常陸國誌 風俗文選 梅窓筆記 和車始

閑田耕筆
剪燈新話
通計六十部

西京雜記
事物紀原

于時明治十九年初冬

妻木賴德



